

< 論文題目 >

下田次郎の女子教育の理念に関する研究

指導教授 森川直

学校教育専攻 14-005 滝澤菜津美

1. 研究の目的

明治時代の女子教育の振興に多大な貢献をした人物の一人に、女子高等師範学校教授として女子の教育に携わった下田次郎(1872~1938)を挙げることができる。明治 37 年に出版した『女子教育』は、はじめに女子の身体と精神の特色を述べた後、女子の教育について説いているわが国で最初の系統的著作とされる。

これまで下田次郎については、女子教育史の流れの中では数多く取り上げられ、「女子と男子との差異の指摘に重点」¹が置かれた良妻賢母の育成を目指したものとして認識されている。例えば、吉田昇は下田次郎の立論の基礎は主として生物学的心理学的な研究によっており、良妻賢母が女子の教育の目的とされていると考察し、「下田氏の所説は結果的には、他の多くの女子教育論と共通であるが、心理学という客観的科学的研究を裏づけとしたところに、重要な展開が見出される」²と評価している。平塚益徳は「研究の成果は教授・訓育の方面で活かされるだけで、女子の本分については良妻賢母主義を所与のものとして受け入れ、時代の進行に即して若干のものを折衷的に組み込んだだけで、首尾一貫性を欠く女性論の色調が強い。官公立女子教育機関の目的である良妻賢母主義に、生理面からの基礎づけをした女子教育論というべきである」³と考察している。

一方、下田の女子教育思想そのものを取り上げた研究としては、小山静子が下田次郎の思想の特徴を以下の 4 点にまとめ、下田次郎を「女子教育の理論的イデオロギーの一人」であり、「良妻賢母思想の一典型」であると考察している⁴。

良妻賢母主義にみられる男女の性別分業や心理的・生理的相違を肯定するものであり、性差が存在する理論的根拠として性差心理学を用いている。

男女の性別分業、心理的・生理的相違を主張する点では、旧来の女大学的女性観の延長線上に位置しているが、理念としては、女大学にみられる男尊女卑観を否定しており、抽象的人間としては男女の平等という観念を強く持っていた。

国家においても、家庭においても第一次的存在である男性に対して、女性を第二次的存在としてとらえている。

家事労働を女性の本来の役割としながらも、女性の社会的活動を否定する思想ではなく、女性の領域を生産労働にまで積極的に広げていった。

しかし、友野清文は下田次郎の女子教育が良妻賢母を求めていたという先行研究に対して、良妻賢母が「女子の中等教育を支えた政策的イデオロギーであるとすれば、政策を直接に担った人々の思想や教育の場で実現された思想(教育目標や内容)を中心として、そ

の周囲にどのような理論が生み出されたのか」⁵という観点からの考察が不十分であると指摘している。

またこの他にも、下田次郎の女子教育が良妻賢母を求めるものだと捉えながらも、当時の思潮から見てユニークであり、進歩的な部分を持っていたと評価するものは多い。しかし、その具体的な内容までは十分に言及されていない。

そこで本研究では、下田が『女子教育』を出版した明治37年ごろの高等女学校における教育や修身教科書から、理想とされる女性像である良妻賢母の姿を描き出し、それと比較することで下田の女子教育の理念が良妻賢母の育成を目指したものであったのかどうかを論究する。そして下田次郎の女子教育の理念形成に大きな影響を与えたと考えられる母親の存在や欧米留学での見聞という思想形成から彼の女子教育の理念をとらえなおすことを通して、その独自性や先進性を明らかにすることを目的とする。

2. 論文の構成

はじめに

第1章 良妻賢母が理想とされる教育

第1節 江戸時代における女大学的な女性観と女子教育

第2節 欧米思想の輸入から起こる賢母観

第3節 高等女学校において求められた良妻賢母

第2章 下田次郎の女子教育の理念形成

第1節 生育過程における母親の影響

第2節 欧米留学での見聞

(1) ドイツの女子教育

(2) フランスの女子教育

(3) イギリスの女子教育

(4) アメリカの女子教育

第3節 帰朝後の下田を取り巻く環境

第3章 下田次郎の『女子教育』における女子教育の理念

第1節 女子教育の理念とその特徴

(1) 女子教育の実状と『女子教育』

(2) 『女子教育』における女子教育の理念

(3) 女子教育の方法と場所

第2節 下田の女子教育の理念に反映される様々な経験

第3節 良妻賢母と下田次郎の女子教育の理念

おわりに

引用・参考文献

3. 論文の概要

第1章 良妻賢母が理想とされる教育

本章では、明治30年代に高等女学校において求められた良妻賢母を、その教育内容や修身教科書を手がかりに明らかにした。その際、その特質をより理解するために、第1節では女大学的な女性観を、第2節では賢母親について考察した。

明治30年代に入ると、高等女学校の数やそこに通う生徒の数は激増し、明治32年には高等女学校令が出され、女子の中等教育が確立する。明治35年の全国高等女学校校長会議において当時の文部大臣であった菊池大麓は、高等女学校では良妻賢母の育成を目的とするべきだと明言している。実際に高等女学校で行われた教育は、修身をはじめ、家事・裁縫などの女子特有の教科に重きが置かれていた。

明治35年に文部省から出版された『高等女学校用修身教科書』の中で、女性は夫に対して貞節を誓い敬愛心を持ってつかえる妻として、家風を重んじ尊敬を持って舅姑につかえる嫁として、子どもを養育し、教育する母親として描かれている。そして、このような家庭内での役割を果たすことを通して国家の一員としての自覚を持った女性が良妻賢母として描かれていた。このような良妻賢母が女子教育において求められていたことがわかる。

第2章 下田次郎の女子教育の理念形成

本章では、下田次郎の『女子教育』出版までの経緯を探り、とりわけ彼の女子教育の理念に影響を与えたであろう母親と欧米留学、帰朝後の環境について考察した。

第1節 生育過程における母親の影響

下田次郎は明治5年、多羅尾進・わさの三人兄弟の次男として広島に生まれた。母親は下田を生んですぐ富岡へ製糸を習いに行っており、父親が戦死してからは、機を織って生活費をまかなっていた。そんな母親の姿に刺激を受け、下田は「何んな事があっても独立生活の出来るやう、婦人も若い中に或る能力を養つておく必要を、母の実際から痛感するのです」⁶と、女子に職業の準備を与えるべきだと主張している。

下田が女子教育に携わる直接のきっかけは女子教育の研究のための欧米留学という偶然的なものであるが、その理念の形成の基盤となる女性像には、母親の姿が影響していたことがわかる。

第2節 欧米留学での見聞

帝大大学院を修了した下田は、明治31年文部省に入り、海外の女子教育の研究を命じられ、32年から3年間、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカへ留学する。

明治32年、9月末に横浜を出航し、11月にドイツのイエナに到着する。1年間、イエナ大学でラインの教育学、オイケンの大思想家の人生観、リープマンの近世哲学史、チーエンの生理学的心理学の講義などを聴講する。33年にライプチヒに移り8か月ほど滞在。当

時、大学にはヴント、フォルケルト、バルトなどが在籍していた。その間ドイツの多くの大学所在地に旅行し、有名な教授の講義を聴講する。34年6月にフランス・パリに移り、ソルボンヌ大学で聴講する。35年2月にロンドンに転学し、ロンドン大学で聴講する。35年9月にアメリカに渡り、主な都市の学校を参観した後、35年11月中旬に帰朝している。

本節では、『女子教育』の第3編第3「欧米の女子教育」における各国の女子中等教育について考察した。

第3節 帰朝後の下田を取り巻く環境

帰朝後、下田は地方の女学校の視察を命じられる。しかし、そこでは女大学式の考え方が根強く、高齢の教師が礼儀や作法のことばかり口うるさく教えていた。そのため、若い下田の説いたり話したりすることは日本の実際とかけ離れてすぎていたことも相まって、聞いてくれる人はほとんどなく「一生懸命に三年間西洋でやつて来ても、教授としてより外に十分に私を使ふ人がない」⁷と当時の苦しさを述べている。

明治36年には、文部省の夏期講習で女子教育の講義を行い、そのときの講習員を中心として、女子教育に従事する男女の教員のための「大日本女子教育会」を組織した。これはドイツの「一般ドイツ女教員会」にならったもので、「女子教育」という機関紙を発刊したり、女子のために講習会や講演会を催したりしたが、会員は消極的で協力する人も少なかったため、雑誌の発行も掛合いも会費の集金も下田が一人で行った。

このように下田は、欧米の進んだ女子教育を吸収して日本に戻った後、日本と欧米諸国の女子教育に対する温度差にずいぶん苦しんだことが理解できる。

第3章 下田次郎の『女子教育』における女子教育の理念

第1節 女子教育の理念とその特徴

『女子教育』は「第1編 女子の身体」、「第2編 女子の心理」、「第3編 女子の教育」という構成で成り立っている。これは当時の日本における女子の理論的研究の遅れに対処しようとしたもので、多くの文献や学説、統計資料等を駆使して、様々な領域における男女の特性を比較検討している。そして、その特性を考慮しつつ教育を行うことを提言している。

下田の考える女子教育の目的は、次の一文に大きく集約されている。

要するに女子教育の目的は、婦徳を養い、良妻賢母及び女子に適当なる職業の準備を与へ、体育を重んじ、知識芸能を授け、美的趣味を涵養し、立派に我が品位を保ちながら社会的ならしめ、以て自他の為に遺憾なく生活せしむるの準備を与ふるにあるのである⁸。

つまり、下田の女子教育は 「婦徳」、「良妻」、「賢母」、「女子に適当なる職業

を与えること」、「女子の生活を完全とするその他の準備」の5つの「女子の本分」を育成することを目的としている。

「婦徳」とは、特に婦人に重きが置かれる徳のことで、貝原益軒の「教女子法」に出てくる四行（婦徳・婦言・婦容・婦功）をもとにしたものである。従来の婦徳は、男性の都合の良いように女性に強いられていたものであったが、これからの日本においては、生活の変化や社会の変化に伴い、「是迄婦徳と見做されて、女に強いられたものの中で、公平な眼で以て、人間として、女子として、残忍酷薄であるものは除かねばならぬ」⁹と述べており、江戸時代に求められた婦徳とは異なっている。

「良妻」とは、良く夫の世話をし、舅姑に良く仕え、家事を巧みに収め、家庭を平和にさせ健康な子どもを産む妻のことを指す。従来の妻が夫に絶対服従であったことを批判し、夫婦は同等であるべきと主張する。妻は家政の整理がうまいだけでなく、夫の相談相手となり、同じ趣味を持ち、意見のやり取りができるようにならなければならない。そうすることで、家庭の強みは国家の強みにもつながると考え、国家の立場からも良妻の育成を求めている。

「賢母」とは、子どもを良く教育し、良く養育する母親を指す。母親には、子どもの精神上・身体上の世話を行わなければならないという養育者の役割と、学校と協力して子どもの教育を行うという教育者としての役割が求められた。

さらに単なる良妻賢母だけでなく、「良姑」という概念が付け加えられ、良い姑となるための心得を高等女学校で教えるべきだと述べている。

「女子に適當なる職業を与えること」とは、夫に先立たれたり、何かあったときのために、女子も独立して生活できるように職業の準備を与えなくてはならないというものがある。適當な職業として、下女、売り子、電話掛り、工女、看護婦、産婆、教師などを挙げている。

「女子の生活を完全とするその他の準備」では、美的教育の必要性や社交性、健康な身体の育成が求められている。従来の女子教育が他者や社会のために尽くす女子を育てるものであったことに対して、自分自身のための教育として美育を重視している。絵画・彫刻・建築・音楽・文学など芸術に対する興味眼識の養成などを通して、集会などには積極的に参加する趣味を持った女性を育成し、男女が互いに理解し合わなければならないと説いている。

第2節 女子教育の理念に反映される様々な経験

本節では、前節で捉えた理念に、2章で考察した様々な経験がどのように反映されているかを考察した。

女子への職業教育は、彼の自伝からも分かるように、母親の姿からの影響が一番にある。しかしそれだけではなく、ドイツの妻とならない人のために職業の準備を与えるということ、イギリスの女子に社会に出るための教育を与える、というものと共通性がみられる。

また、学校の制度上のあり方等については、ドイツの女学校を例にとり、授業時間や時間割、宿題にいたるまでドイツを参考にしている。また教授法についてはヘルバルト教育学の影響が見受けられるなど、ドイツでの見聞が下田の女子教育の理念に深く浸透しているといえる。

教師と生徒の関係についてはアメリカの例を挙げて、日本もアメリカのように教師は生徒を信頼して、責任を持たせ、のびのびとした生徒を育成するよう注意している。これは、下田が帰朝後に訪問した女学校での経験が反映したものと推測できる。

このように、下田の女子教育の理念においては、彼の母親や帰朝後の経験、とりわけ欧米留学の見聞が大きく影響していることがわかった。

第3節 良妻賢母と下田次郎の女子教育の理念

そもそも、この『女子教育』という著作は、「例言」によると、明治 36 年に文部省及び東京府夏期講習会で行われた講義を拡張訂正したものであるという。そこで『婦女新聞』に掲載されている明治 36 年の夏期講習の「女子教育の目的」から分析したところ、下田の女子教育の理念、とりわけ女子教育の目的は、『女子教育』におけるそれとほとんど同じであり、下田が欧米留学から戻ってから 9 ヶ月後の間に完成されていることがわかった。そのため、その理念には欧米留学での見聞が多分に影響されていると推測できる。

また『女子教育』出版から 3 年後の明治 40 年に文部省の検定を経て出版された井上哲次郎の『訂正女子修身教科書』は、男女は身体的・心理的に異なっているため、その特性を活かした役割を果たすことが、国民として、社会の一員としての使命を果たすとみなされており、また職業教育についても言及されている。このような女子の身体的・心理的特性への着目や、職業教育という考え方は、下田の『女子教育』に見られるものであり、下田の女子教育の理念が、実際の修身教科書にも浸透していった。

4 . 本論文のまとめ

下田の女子教育の理念は、女子に女子としての婦徳を求めつつも、江戸時代の女大学的な男尊女卑観を取り除いており、女性の自立を見越した職業教育の必要や、女性に社会に出て交際を広げることを勧めるというものであった。そしてその前提として、男女の身体的心理的違いを明らかにしている。このような考え方は、欧米留学での見聞にその端緒が見られ、明治 37 年当時には高等女学校では求められていない女性像であった。したがって下田次郎の女子教育の理念は、当時において求められた良妻賢母像に留まらない、新しい可能性を持つものであったといえる。もちろん、当時の日本において古くから理想とされていた女性像からの影響を受けていることは否定できない。しかし、欧米の女性観に大きく影響を受けている下田の女子教育の理念を、単に良妻賢母の育成を求めたものと断言することはできない。

その一方で、性差心理学に基づく女子の身体的・心理的考察は、明治 40 年代以降における修身教科書において男女の性別役割分業の根拠として用いられるようになる。そして、その新たな良妻賢母は第二次世界大戦まで、女性の理想像を超え、女性のあるべき姿として女性を縛り付ける役割を果たすことになった。この意味において、下田次郎が良妻賢母の理論的根拠を提出したという小山の解釈を否定することはできない。また本論文では、下田次郎の女子教育の理念を当時の高等女学校において求められた良妻賢母という観点から考察したため、同時代に活躍した思想家たちとの比較対照による下田次郎の歴史的 position 付けがなされていないという問題が残っている。この点については今後の課題としたい。

-
- 1 皇晃之「下田次郎の経歴・思想と『女子教育』」(下田次郎『女子教育』玉川大学出版部、1973年) 481頁。
 - 2 吉田昇「明治以降における女子教育論の変遷」(土屋忠雄/他著『女子教育特輯：野間教育研究所紀要第1輯』大空社、1992年) 175頁。
 - 3 平塚益徳「人物を中心とした女子教育史」(『平塚益徳著作集第 巻日本教育史』教育開発研究所、1985年) 358～360頁。
 - 4 小山静子「近代的女性観としての良妻賢母思想 - 下田次郎の女子教育に見る一典型 -」(日本女性学研究会「女性学年報」編集委員会編『女性学年報第3号』、1982年) 2～5頁。
 - 5 友野清文「良妻賢母思想の変遷とその評価 近年の研究をめぐって」(『歴史評論 517号』、1993年) 62頁。
 - 6 下田次郎「私の母」(『婦女新聞第49巻』不二出版、1982年) 469頁。
 - 7 同上、57頁。
 - 8 下田次郎『女子教育』日本図書センター、2002年、294頁。
 - 9 同上、299頁。

5. 引用及び参考文献

- ・ 下田次郎『女子教育』(近代日本女子教育文献集第7巻)日本図書センター、2002年。
- ・ 下田次郎「私の今日まで」(『教育 第2巻第1号』)44~60頁)岩波書店、1934年。
- ・ 下田次郎「私の母」『婦女新聞第49巻』469頁)不二出版、1982年。
- ・ 下田次郎「女子教育」(『岩波教育科学 第14冊』)岩波書店、1932年。
- ・ 下田次郎「女子教育の目的」(『婦女新聞第4巻』308、314、322、330、338頁)不二出版、1982年。
- ・ 下田次郎「女子教育の目的に就いて」(『婦女新聞第5巻』50頁)不二出版、1982年。
- ・ 井上哲次郎「訂正女子修身教科書」(高等女学校研究会編『高等女学校資料集成第10巻修身教科書編』89~205頁)大空社、1989年。
- ・ 石川松太郎『女大学集』平凡社、1977年。B片山清一『近代日本の女子教育』建帛社、1984年。
- ・ 石川松太郎編『日本教科書体系 往来編 女子用』講談社、1973年。
- ・ 氏原陽子「『母性』の概念 『良妻賢母』研究とフェミニズム」(『名古屋大学教育学部紀要第40巻第2号』101~113頁)1993年。
- ・ 氏原陽子「明治期における理想的女性像 小学校女子用修身教科書のジェンダー論的分析」(『名古屋大学教育学部紀要第42巻第1号』93~102頁)1995年。
- ・ 氏原陽子「良妻賢母をめぐる女性像 明治期小学校修身教科書の分析から」(『名古屋大学教育学部紀要第43巻第1号』117~127頁)1996年。
- ・ エリザベート・バダンテール、鈴木晶訳『母性という神話』筑摩書房、1998年。
- ・ 大林正昭・湯川嘉津美「幕末・明治初期における西洋教育情報の受容 - 近代日本政党教育情報の研究(第4報)」(『広島大学教育学部紀要第1部第35号』31~42頁)1986年。
- ・ 金子茂「ツィラーとライン 民衆学校の実践の定型化を目指して」(宮澤康人編『三訂版近代の教育思想』149~157頁)放送大学教育振興会、2003年。
- ・ 唐澤富太郎「下田次郎 - 女子教育の研究と実践につくす -」(唐澤富太郎編著、『図説教育人物事典 - 日本教育史の中の教育者群像』下巻945~949)ぎょうせい、1984年。小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年。
- ・ 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史第4巻』教育資料調査会、1964年。
- ・ 古久保さくら「『良妻賢母という規範』からみえるもの」(『女性学年報第13号』146~150頁)1992年。
- ・ 小山静子「『良妻賢母』と家族制度」(『女性学年報第13号』75~82頁)1992年。
- ・ 小山静子「近代的女性観としての良妻賢母思想 - 下田次郎の女子教育に見る一典型 -」(日本女性学研究会「女性学年報」編集委員会編『女性学年報第3号』1~8頁)1982年。
- ・ 小山静子「高等女学校教育と良妻賢母観」(『京都大学教育学部紀要27』94~104頁)

- 1981年。
- ・ 小山静子「良妻賢母主義の黎明 女子用往来本を通して見る賢母論の登場」(『女性学年報第7号』11～20頁)1986年。
 - ・ 柴本枝美「明治期高等女学校における良妻賢母の教育について 京都府立第一高等女学校を中心に」(『関西教育学会紀要27』56～60頁)2003年。
 - ・ 皇晃之「下田次郎の経歴・思想と『女子教育』」(下田次郎『女子教育』463～491頁)玉川大学出版部、1973年。
 - ・ 栖原彌生「女子リセの創設と『女性の権利』」(谷川稔、原田一実、谷口健治、田中正人、渡辺和行、小林亜子、小山静子、栖原彌生、山田史郎、村上真弓、藤川隆男、常松洋、小澤英二、松井良明『規範としての文化 文化統合の近代史』269～303頁)平凡社、1990年。
 - ・ 世界教育史研究会『世界教育史体系34 女子教育史』講談社、1977年。
 - ・ 舘かおる「下田次郎著『女子教育』解説」(『近代日本女子教育文献集<第 期>解説』93～104頁)日本図書センター、2002年。
 - ・ 舘かおる「小山静子著『良妻賢母という規範』書評」(日本教育学会「教育学研究」編集委員会『教育学研究第59巻第2号』217～219頁)1992年
 - ・ 舘かおる「良妻賢母」(女性学研究会編『女のイメージ』184～209頁)勁草書房、1984年。
 - ・ 大日本学術協会編集「下田次郎氏の教育学」(『日本現代教育学大系3巻』1～103頁)日本図書センター、1989年。
 - ・ 田村栄一郎「良妻賢母主義の形成と変遷」(『武蔵大学人文学会雑誌21巻3.4号』15～32頁)1990年。
 - ・ 土屋忠雄「女子教育」(石山脩平他編『教育研究事典』838～844頁)金子書房、1954年。
 - ・ 友野清文「良妻賢母思想の変遷とその評価 近年の研究をめぐって」(『歴史評論517号』56～67頁)1993年。
 - ・ 中嶋邦「女子教育の体制化 - 良妻賢母主義教育の成立とその評価 -」(『講座日本教育史』編集委員会『講座日本教育史』101～126頁)第一法規出版、1984年。
 - ・ 日本女子大学教育研究所『明治の女子教育』国土社、1967年。
 - ・ 額田淑・横田貞子「良妻賢母主義教育に関する研究(第2報) 文相・菊地大麓と良妻賢母主義」(『美作女子大学・美作女子短期大学研究紀要』108～118頁)1981年。
 - ・ 姫岡とし子「労働者家族の近代 世紀転換期のドイツ」(荻野美穂、田邊玲子、姫岡とし子、千本暁子、長谷川博子、落合恵美子『制度としての<女> 性・産・家族の比較社会史』137～186頁)平凡社、1990年。
 - ・ 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明出版、1990年。
 - ・ 間宮武『性差心理学』金子書房、1979年。

- ・ 真橋美智子「下田次郎の家庭教育」(『日本女子大学紀要人間社会学部』179～192頁) 2000年。
- ・ 光田京子「近代的母性間の受容と変形 - 『教育する母親』から『良妻賢母』へ」(脇田晴子編『母性を問う(下) - 歴史的変遷』100～129頁)人文書院、1985年。
- ・ 三井為友編『日本婦人問題資料集成第4巻 教育』ドメス出版、1977年。
- ・ 牟田和恵『戦略としての家族 - 近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、1996年。
- ・ 文部省「高等女学校用修身教科書」(高等女学校研究会『高等女学校資料集成第10巻修身教科書編』3～85頁)大空社、1989年。
- ・ 横田貞子・額田淑「良妻賢母主義教育に関する研究(第1報)“期待される女性像の変遷”」(『美作女子大学・美作女子短期大学研究紀要』48～58頁)1974年。
- ・ 吉田昇「明治以降における女子教育論の変遷」(土屋忠雄/他著『女子教育特輯：野間教育研究所紀要第1輯』135～198頁)大空社、1992年。
- ・ 笠峰「良妻賢母について - 文学士下田次郎氏に問ふ」(『婦女新聞第5巻』7、20頁)不二出版、1982年。